

NAC「草」の根平和大使「広島からも

「原爆語って」募集

米国滞在、6年ぶり再開

25年続いてきた平和ボランティア活動「ネバーアゲイン キャンペーン」(NAC)が10期目の「草の根平和大使」を募っている。日本の若者らが米国に3カ月間滞在し、学校や教会などで原爆の実情を話して回る。代表の北浦葉子さん(52)「兵庫県三田市」は「被爆地・広島からも熱意ある人が手を挙げてほしい」と呼びかけている。(加古靖史)

NACは、北浦さんと米ニューヨーク州在住の平和学者ドナルド・レイスロップさんの提唱で1985年に発足した。「大使」の募集は6年ぶり。これまで51人が渡米し、延べ36万人以上に話をした。従来は半年〜1年間、米国内の支援者宅に滞在して各地を回っていた。ところが2001年の同時多発テロ以降、米政府がビザの発給を厳格化。長期滞在が難しくなった。北浦さんは「大使を選んでもビザが取れないのは困る」と思い、募集を止めざるを得

平和を考える

なかった」と話す。

ただ、昨年4月のプラハ演説でオバマ米大統領が「核なき世界」を目指す表明。レイスロップさんや日本国内の支援者らの間で、「この好機を逃してはならない」との声が熱を帯びた。このため派遣期間をビザなしで滞在できる3



カ月間にちぢめ、再募集に踏み切った。渡米前にメールでなるべく多くの現地の訪問先の約束を取り付けることで、活動の密度を濃くする。

9期目の大使だった高校臨時教員の吉清由美子さん(31)「海田町」は同時多発テロがあった01年、米国に留学していた。それまで平和活動に特に関心はなかったが、テロと戦うために核兵器の使用も辞

さないとの世論が高まったことに強烈な違和感を覚えた。広島出身者としてできることを模索していた矢先、NACの活動を知った。

04年の募集時に大使に選ばれ、06・07年に渡米。中西部ミネソタ州ミネアポリスを中心に、のべ220回話した。NACでは事前に広島、長崎で合宿して研修をするものの、どう伝えるかは一人一人の大使に委ねられている。

米国では「原爆投下はしかたなかった」と思っている子が多い。吉清さんは渡米前に

「草の根平和大使」として米国の子どもたちと一緒に折り鶴をつくった吉清由美子さん(中央)。多くの子が真剣に耳を傾けてくれたという吉清さん提供

会った被爆者と一緒に撮った写真を見せ、彼らが今なお苦しんでいる被害の実態を伝えたいと、本人を前にして「原爆は正しかったと言える？」という話をわかってもらおうと努めた。

ある高校では黒人の男子生徒がいきなり、「原爆を悪いと思っただけよ」と吉清さんに言い放った。だが吉清さんが話を終えると、生徒は「全然知らなかった。あんなことを言っでごめんなさい」とわびてくれた。

「それまでの苦労もすべて吹っ飛びました。あれだけの感動は人生でまず味わえない。ほかの人にもぜひ挑戦してもらいたい」と吉清さんは力を込める。

募集人数は5人程度。3月5日までにNAC事務局(メ

度)の英語力を求めたいという。3月下旬から4月上旬に来日するレイスロップさんらと面接して選考する。現地での住居や食事は支援者が提供するが、渡航費は自己負担。

メール: nac.staff@gmail.com
ホームページ: http://nac.junyx.net/

経歴、写真、日本語と英語による志望動機書(日本語で1千字程度)を送る。高卒以上で、意思疎通ができる程